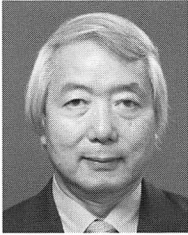


## 還暦の佳日を祝して



関西大学  
学長 河田悌一

「光陰 矢のごとし」と申しますが、このたび、関西大学体育会レスリング部が、創部60周年の佳日を迎えられることとなりました。心からお祝い申し上げます。

60年といえば、「甲子」からはじまる「十干十二支」という暦が一巡して、元にもどる「還暦」を迎えるわけです。この60年の長い歴史の中には、市口政光選手の東京オリンピック優勝、そのほか多くの選手の世界大会での活躍など、さまざまな大きな成果がありました。本年は17年ぶりに1部復帰を達成。古豪復活に向けて期待が大きく膨らみます。

10年前、50周年を記念して作成されたレスリング部50年史『青春のパライストラ』を拝見しますと、そこには、創部から第1～3期黄金時代、そして創部50年までの歴史が詳しく掲載されています。その年々の出来事「この年の思い出」には、多くの卒業生の「熱い想い」が記してあり、歴史と伝統、そして強固なOB会を垣間見ることができました。

また、レスリング部OBであり、私と同じ文学部に所属されている伴義孝教授と安田忠典准教授の活躍をも拝見することができ、両名あってこそ現在のレスリング部が存在していることも、感じることができました。

古代ギリシャ・ローマ時代から存在し、オリンピック種目である格闘技レスリング。

その競技は、誰にも助けを借りることができない1対1の闘いであり、自分の力だけを頼りに戦わなくてはなりません。その試合の過程は、過酷であり孤独であることでしょう。

そこに卑怯という言葉は存在せず、フェアプレーの精神で戦わなくてははいけません。そのような競技を続けることで、競技者たる部員諸君・諸氏は忍耐力と持久力の必要性を学びます。そして、このことから、まさに社会に役立つ様々な力が備わるのであります。ここにこそレスリングの魅力、仏教用語でいう「醍醐味」がある、と私は確信します。

戦後のオリンピックでは、毎回のメダル獲得が当然とされており、来年2008年の北京オリンピックでも、金メダルが期待されております。先日行われた世界選手権では、惜しくも女子レスリングの全階級金メダル獲得に至らなかったものの、“レスリング王国 日本”を感じることができました。

過酷で孤独な闘いを身をもって感じている現役の学生諸君——。諸君にはクラブの仲間、そして体育会の仲間と先輩諸氏、さらに私たち教職員がいて、熱烈に応援しているのです。日本代表選手たちと同じように、関西大学レスリング部もその60年の歴史と伝統を継承した、納得のできる結果を取め、第4期黄金時代を実現して、関西大学の名を世界に高めてくださることを、私は学長として心から期待しております。